

失われた芸術の再発見

(QR code, Room 3)

珠洲の独特な焼物は、1951 年にひとつの骨壺が発掘されるまで、ほぼ忘れられていました。さらなる発掘により、珠洲周辺で 40 の窯が発見されました。初期の珠洲焼は、丘の斜面に作られたトンネル状の「窖窯」(あながま。穴窯とも呼ばれます) で焼かれていました。これらの大きな窯には、長さ約 9 メートルの部屋がありました。正面には小さな扉があり、そこから焼物を入れたり、火を燃やしたりします。窯の後方には煙道と煙突がありました。当資料館の敷地には、13 世紀の「窖窯」を実物大で復元したものがあります。

温度は 1,200℃を上回ることもありました。また、窯は、温度を維持するために、薪を燃やし続ける必要がありました。焼成には、48 時間から 1 週間かかることもありました。焼成の終わりに火は消され、窯の入口と煙道が封じられました。この方法で窯内の酸素を減らすと、木の灰とすすが粘土中の鉱物と相互に作用し、灰色がかった黒色と自然の釉薬が生じました。

1972 年、陶芸家の小野寺玄 (1934～2016 年) は、珠洲焼作りの伝統的な方法をよみがえらせるために、珠洲の粘土で実験を始めました。現在、能登半島で珠洲焼を作っている陶芸家は、約 40 名います。これら現代の作品のいくつかは、当資料館に展示されています。また、珠洲焼作りの工程の概要を紹介した映像が上映されています。